

ぬり薬の容器内で細菌などが繁殖してしまふことがあります

細菌・カビは水のあるところで繁殖します。クリームには水が含まれているため、細菌などの繁殖を防止する目的で防腐剤と呼ばれる添加物が配合されています。しかし、保存のしかたが悪い場合などでは容器内でクリームの油と水が分離することがあります。その場合、防腐剤が十分に作用せず、細菌などが繁殖してしまふことがあります。

一方、水を含まない軟膏では、防腐剤が含まれていないため、手についた水が軟膏の表面につくと、細菌などが繁殖してしまふことがあります。

細菌などの繁殖を防ぐために

- ぬり薬の使用前後にはきちんと手洗いをしましょう
- ぬり薬をつける際、症状のある部位にチューブの口などを直接つけないよう気をつけましょう(ぬり薬は症状のある部位に直接つけるのではなく、一端手の上にとり、ぬるようにしましょう)
- 水がぬり薬に入らないように気を付けましょう
- ぬり薬はふたをきちんと閉めて保存しましょう
- 保存温度が決められている場合は、きちんと守りましょう*
- 使用期限を守りましょう*

※保存温度、使用期限の記載場所については、「ぬり薬のぬり方患者様指導資料」をご参照ください。以下URLよりダウンロードできます。

http://www.iwakiseiyaku.co.jp/products/product_m/koushin/news_shiryo.html (2013年5月現在)

さまざまなぬり薬 軟膏 クリーム ローション

ぬり薬には軟膏とクリームだけではなく、ローションなどのぬり薬もあります。

例えばフランカルボン酸モメタゾン軟膏0.1%、フランカルボン酸モメタゾンクリーム0.1%、フランカルボン酸モメタゾンローション0.1%はいずれも効果のもととなる成分(主薬)が同じで、濃さも同じ0.1%ですが、ベースとなる成分(基剤)が異なるものです。

ローションは水やアルコールなどを基剤としたものです。



医療機関

提供：岩城製薬株式会社

2012年10月作成



軟膏とクリームには違いがあることを知っていますか？

医師は皮膚の症状や部位に応じて軟膏とクリームを使い分けることがあるため、その違いを知っておくことが大切です。

【監修】

東京通信病院 薬剤部 副薬剤部長
大谷 道輝 先生

IWAKI SEIYAKU CO., LTD.

軟膏とクリームの違い

ぬり薬は効果のもとになる成分(主薬)が、ベースとなる成分(基剤)に混ぜ合わせてあります。みかんゼリーに例えると、主薬はみかんで基剤は寒天です。軟膏とクリームでは異なる基剤が使用されています。

基剤の違いにより

【使用感(べとつき感など)】
【刺激】
【皮膚への浸透しやすさ】
などが異なります

症状やぬる部位により
使い分けることがあります

軟膏とクリームの比較

	軟膏		クリーム
べとつき感	大	>	小
刺激	小	<	中
皮膚への浸透しやすさ	小	<	大

※一般的な傾向を示しており、ぬり薬により異なる場合があります

“軟膏”

刺激の少ないぬり薬です



軟膏は、油脂性のワセリンを主に使用したぬり薬です。水溶性の軟膏もあります。

(油脂性は油に溶ける性質、水溶性は逆に水に溶ける性質のことです)

☞ 適した症状・部位

- ほとんどの皮膚疾患に使用できます
- 傷がある部位にも使用できます
- ジュクジュクした部位には特に水溶性の軟膏が適しています

☞ 適さない症状・部位

- ほとんどありません

☞ 特徴

- 刺激がほとんどありません
- 皮膚を保護したり、柔軟にする作用があります

“クリーム”

さらさらとした使用感のよいぬり薬です



クリームは、水と油を混ぜて乳化した基剤を使用したぬり薬です。

(水と油を混ぜると通常分離してしましますが、界面活性剤を加えることで混ざり合います。この状態を乳化といいます。乳化しているものの例として、牛乳やマヨネーズがあります)

☞ 適した症状・部位

- 皮膚から吸収されやすいため、水虫や筋肉痛など、皮膚の深いところにぬり薬を浸透させたい場合に適しています

☞ 適さない症状・部位

- 軟膏に比べ刺激があるため、傷がある部位やジュクジュクした部位には適していません(傷がある部位にぬると刺激を感じる場合があります)

☞ 特徴

- 使用感がよく、のびがよいです
- 水で簡単に洗い流せます

※軟膏とクリーム、どちらかを選択したいなどの要望がある場合は、医師に相談し、指示された薬を使うようにしましょう。